九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

今井源衛著『王朝末期物語論』

辛島, 正雄
徳島大学助教授

https://doi.org/10.15017/11971

出版情報：語文研究. 63, pp.67-70, 1987-06-03. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

《紹介》

今井源衛著『王朝末期物語論』

辛島正雄

〈物語〉といえば、いかにも平安時代の文学という印象が強いのであるが、その命脈はことのほかしぶとく、後々まで永らえたようである。おそらく、鎌倉・南北朝期を越えて、室町中後期にまで及ぶのではないかと思われる。文学史的常識では、その荷い手であった貴族階級の没落と命運をともにするようにして物語は滅び、新興のお伽草子にとって代わられる、ということになるのであろうが、事実はさようの交替劇といった単純なものではなさそうである。

ところで、〈物語史〉を構築しようという時、往時は無慮数百もあったかと思われる物語の偶然現存しえた三十余りの作品を時間軸に並べて、それで事が足りるわけでないこと、いうまでもない。が、だからといって、そうした作業が徒労であるとはなから決めつけるわけには、なおさらゆかない。いな、わずかこれだけしか残存しえなかったからこそ、まずはそれらを一つ残らずしかるべき位置に据えてみる努力が必要であるに違いないのだ。しかしながら、物語（史）研究は、かけ声の大きさにもかかわらず、依然その前段階にとどまっている現状を認めざるをえないのではあるまいか。むろんそこには、それらの物語のほとんどが『源氏』亜流にすぎず、『源氏』研究の進展の中でおのずと解消されてしまう底のものであるといった信仰のようなものが少なからずはたらいているのであろうが、この〈『源氏』亜流〉なるレッテルほど物語研究にとって有害無益なものもないであろう。このレッテルをもち出しては、滔々たる物語の流れも、ほとんど隠されてしまいかねないのだから。

むずかしく考える必要はないのだ。それぞれの物語がそれぞれの時点でたしかに作られ、かつ楽しまれたであろう、その一事を、私たちはもっと素直に認めてよいはずである。『源氏』以後の物語はその呪縛を逃れることができないと考える以前に、今日の私たち自身が『源氏』の呪縛から自由になることが先決なのであろう。要は、『源氏』以後を無視した物語史が何と寥々たるものであるかを、現存する作品数から物理的にでも認識しておきさえすれば、事態はよほど変ってくるに違いないのだ。

――というような、自己正当化というか、大袈裟にいえば自分自身の研究のアイデンティティーを模索していた矢先、今般の今井源衛氏の好著の刊行に出逢った。題して『王朝末期物語論』という。いったい、『源氏』以後の物語をひっくるめて何と呼ぶかは、それ

だけでも大問題である。平安後期物語・平安末期物語・院政期物語・鎌倉時代物語・中世擬古物語などなど、論者によって区々であり、およそ帰するところを知らない。そのような中で、著者が「王朝末期」の語を用いたのは、やはり一つの立場を示すものであろう。いわゆる藤末鎌初が文化史的に一続きのものであることはもはや常識であり、政治史的な区分をそのまま文学史の区分に流用するがごとき野蛮なことはありえないと思うが、いつまでともなく王朝盛時に舞台をとり続ける物語といえども、やはりさまざまなかたちで時代的変遷の影を宿してしまうには違いないのである。が、その変化の波のただ中にあってさえも、公家たちの想念は、一条朝、あるいは白河院政期へと回帰してゆくものであったことは知っておくべきであろう。そうした意味あいにおいても、「王朝末期」というとらえ方は、一つの有効な視点たりえている。

さて、本書は、かたちの上からすれば著者の第四論文集ということになるのだろうが、各論文の初出を見れば知られるとおり、著者のライフ・ワークともいうべき『源氏』研究のかたわらでなされてきた仕事の集成である。まずは、目次を掲げておこう。

一　王朝物語の終焉
二　『讃岐典侍日記』論
三　『とりかへばや』論
　(一)梗概
　(二)文学性
　(三)『とりかへばや』醜穢論をめぐって
四　『我身にたどる姫君』論
　(一)梗概
　(二)概説
　(三)性愛描写
　(四)ユーモア
　(五)本文の再建
　(六)巻六の成立
五　『苔の衣』論
六　『八重葎』論

総論的な「一」を枕に、四つの物語について詳しく論究がなされる。中に、「二」が異質であるが、つとにこの日記の新しい読みを提示したものとして名高いこの論文が、『源氏』研究に焦準を絞った旧著に収めえなかったことから、時代的に重なってくるところのある本書に盛り込まれることになったものであろう。以下、内容を簡単に紹介しつつ、多少のコメントを添えてみたい。

「一」では、鎌倉以降の物語の衰退・消滅の様相を、歴史社会的状況と見合わせながら概観する。早く昭和二十九年に発表された論考であり、著者自身「はしがき」で一言されているように、多少「図式的」との感がなきにしもあらずであるが、この期の物語の趨勢への展望としては、今なお指標的論文たりえている。なお、論中『とはずがたり』への言及が何度かあるが、例えば後堀河院二条といった誤りが初出のままに残されている（21頁の後嵯峨院も、亀山院とするのが正しい）ので、しかるべく訂正を望みたい。

「二」は、『讃岐典侍日記』理解の根本に、堀河帝と作者とが、主従の関係にとどまらず、男女の愛情関係で結ばれていたと押えておくことの重要性を明確に打ち出した、初めての論である。現在のこの日記の作品論の起点となったという意味でも、まさしく記念碑的

論文であった。

「二」では、巷間に偏見の強い『とりかへばや』(厳密にいえば『今とりかへばや』)につき、詳細な梗概が示された後、その文学的特質が浮き彫りにされる。ことに、この物語があくまで女の側に立って女の問題を追求している点を説かれるのは、近年のこの物語を〈女の物語〉の流れの中に位置づけようとする動きのさきがけをなすものであり、注目される。また、この物語に対する藤岡作太郎の著名な「醜穢読むに堪へ」ずとの批評の不当性を衝き、とかく安易に口にされることの多い「退廃」の概念への再考を促す。なお、瑣細なことながら、梗概の75頁に、「そのあと、帝はそ知らぬ顔で、中宮に、『大納言の若君は、世間では女院が母親だというが――』と切り出して、そのつぎに『今大将の若君のほうは、いったいだれだろう』と、女院の顔をうかがうと」とある傍線部は、①今大将、②大納言、③中宮とすべきであろう。

「四」は、質量ともに本書の中核をなす。ここでも詳しい系図と梗概とが示され、続いて種々の観点からこの問題作の本質が闡明される。概説は、それらの要点が集約されており、はなはだ便宜であるが、この物語の文学的な魅力については、性愛描写とユーモアの両節によって、つぶさに知らされるであろう。本文の再建の節では、現存諸本による本文批判の結果、難解をもって聞こえるこの物語の本文が、存外軽微な損傷しか蒙っていない事実を明らかにし、難解の原因がもっぱら原作の文体そのものにあることを示される。さらに、巻六の成立の節では、かねて議論の多いこの問題につき、内部徴証による限り巻六が他の巻とうまく連絡していて矛盾のないことから、「他の巻と同時に、その巻序のままに執筆された蓋然性が大」(208頁)だとされる。ただ、一方に、巻六に登場する前斎宮のモデルの存在が有力視されており、最終的な決着は今後の課題として残されている。

「五」も昭和二十九年初出の古い論文であるが、今回、ほとんど全面的な書きかえがなされ、系図・登場人物索引等が添えられ、面目を一新した。この物語は編年的に描かれているにもかかわらず、年立上の矛盾・不整合がきわめて多いことを指摘し、作者がそのような点にもともと責任を負おうとしていなかったらしいことを、個々の場面や趣向が、全体とかかわりなく、先行の物語とのイメージの重層の中で楽しまれるように作られていることを確かめることによって説明する。『苔の衣』の年立のでたらめさは、実は物語史上できわめて例外的であるのだが、そのことがかえって、筋書化する多くの物語のある一方、場面の点綴と化す物語の存在を知らせてくれるのであり、当時の物語のありかたを考える上で、すこぶる貴重なのであった。

「六」では、南北朝頃の成立と目される小品『八重律』について、伝本・年立・典拠・成立・表現・構成・史的位置等、多岐にわたる問題が適切な判断によって要領よく整理されている。典拠については、(?)のついた「玉のうてなもやへむぐら」(276頁)が、『古今和歌六帖』第六・むぐら・三八七四番の、

なにせんにたまのうてなも八重むぐらいづらんなかにふたりこそねめ

を引くものであるほか、多少補いうるものもあるが、今は省略に従う。

以上、ほとんどアウト・ラインしか示しえず、著者に申しわけな

く思う次第であるが、本書全体を通じて一貫している一番の特長をあげるとすれば、いずれもが各作品の精緻な読みの上に立って展開された論考だということであろう。「三」の前提としては宮内庁書陵部蔵本の影印本刊行や『鑑賞日本古典文学』での評釈作業があったわけであるし、「四」は桜楓社版『我身にたどる姫君』七冊を刊行する過程での産物であったし、「六」も『古典文庫』での翻字・附注の仕事が裏打ちとしてある。要するに、伝本調査、本文整定、典拠博捜、梗概・年立・系図への整理、といった、根気のいる地味な作業が手ぬかりなく行われているところに、千金の重みがあるということなのだ。すでに三角洋一氏が本書を評して、

処女地開拓の篤実重厚な諸論というにとどまらず、擬古物語の研究手つづきの具体的な手本を示す書である。

（「学界時評　中世」〈「国文学」32巻2号　昭62・2〉）

と述べていられるが、まったく同感である。今後本書が、小木喬氏の名著『鎌倉時代物語の研究』と相並んで、この期の物語研究の基本文献となるであろうこと、疑いを容れない。

ともあれ、本書の刊行は、私のような後進にとって、まさに千万の味方を得たような思いである。「源氏や狭衣の模倣をもっぱらとする駄作ばかりだといわれていたいわゆる〈擬古物語〉が、読んでみれば案外面白い」（「はしがき」）などと、正面切って今まで誰がいってくれたことがあったろうか。最後に、身の程を顧みずあえていおう――「貶められ続けてきた鎌倉の一群の作品にきめこまかく目を配って、しかるべき適正な評価を」（同）という著者の願いは、徐々にではあるが、実現の機運が確実に高まりつつあると。

（昭和六十一年十月　桜楓社刊　二九〇頁　二二、〇〇〇円）